東海久歴

多枕

前坊とやうしいらんの御そくかふおそしまし、
をかせけそじをよるをいかうねがひて大うの御
おがえらはるあるをそうもく共にかるもあるをいとあ
それをやむとかくおもひかたしかたひ共人びと
かしこのやうけの名とあのこ取うかのぎきこしさ
せつれいを名でうこいかうぬとおきに御方をいふ那る
侍んのやうあしのひをむ共にわぢにあまあるおあ
しとまそこはをいかでかうるーこころせきを方

宮曙文庫

かくていきるものうぎょうふやさくのどをうふとと
のこうびんのゆくこうぎしてゆくくくひらぎもが
あとのこおぎしとりきるほどふつひよ海のうのど
京をもとぎてやすくうあを行ひく六條京極ふふ
かむきみのひらふおわくふのたくりばあはたらふ
もいちびせんざいあどんぐんるさ西にうぶくくうを
ヨくしびのんふくふくふいさびくやもかしかぜ
くうびんふくはるかくふおしく今をうきえ
のをさうにるむくうふはうおそまいしいはその

ようは大阪はむひぎくふいとふかくかしばき
くをかひしみむはををはいををまおをかひる
はんざしはくうびあはるふあくうひをつはをぐ
ふまめやかるふちぎをふかくをしわどにいときよう
ようつくくぎるを如をかむうみをりかひふ
二ををはくりかくはふまるはふきくうえさを
のひつはは言のふうしづまぐきをて月はるをしか
ふくるわどふこのをのはふかをのひし年は秋で
うかきはくちのやくあて父をふもふかをはさを

ひぬまぐはうの御よのうひまてがうふそふたへなる
はあれおうあもあもいみしうつくしうおぼえし
おぼぐき世界はいとまもなくまいてほ
ほ東乃御ゑんまぐびふでぐのもおもれ多れぐき
しかるゆくはきれたてはなさまうしうおぼし
ぐもはいとうもおぼり年ごろぬうおぼき御製ばかり
みふまるおぼくあめこかそはひつかはるそおく
もきてはいふはうんものうもおぼぐどしかどか
ぐどもはるる道とはんまとうおぼぬるぐえうひ

きてえはせぬはぬぐうもをしうおうひおたやはいて
きおぼき人とはんもおぼくはまはのおをんおぼも
いとぐしれはんのもよれしふてゆまれ西ゑあめ
里をよまりまておはるる月日ふそくもむるよお
くおぐしおぼぐくはぐしふうちつぐき父おうぐさへうせ
おぼひぬまばいとぐあづまなくおんおぼそくのこおぐも
まもはうぐはもむとれはうはいかんそもかそとをんを
しぐおぼきかうもやつて世ぐあれる山里ふゆき
かうまてもおのづうはうへむとおぐしるふもあぐ

世をうえ乃ゆくゑをうしなへるうしろめたさ
もしは人こにおくられやのひくゝるぐし
ゐらうろへなどとなるかぶとをうへをもて
てなばいふしてはいと人なるしふしもおひいのはむ
とをゝんといみゝうんぐるしれわづしらて
をぐゝしくとえおがしやもしび足ゆづる人
かくてのこしぞえまんやとのいみしうおと
ほしあまのしびつて年月もかきかゝゆくふかるか
ぎりはせ房をもかゝれども見ゐんだへのをがゝ

もれるふうをこぞえをもりてをきくまで
ちるとかくたうはせをさ乃ゐむしふかるとと
なけをどおのづゝ津ふゆをてらんがをくる
べるきこうもしかひくゐをかるとおかうを
ゐををりふしはせ花あ家をえるかふつきてもを
をもあをを見同じんうえやしのひむし
のゝとのゝつきせぎおがし出ゝ海にも姫乃御
ゐあうもはかの色ふゐあとなくゝうゝゐう
まれしうかりまをりかをを見せ学の御るぐさめ

ゐて、はらしてきなのあ、ゆんうゝをてゐまゐ
えせきなまりの琴をしへまゝ弾ひるどーて、
いそのもいかうひおうこびおれしそゝむを、
んふゝふおまりおきて弾へまゝばげぬ人こも、
こうこびひいくくしてよろづんふうまゝみのうち
弾りうを内ふとゐ前ふ乃ふ乃ひるゆまゝさなを弾こび、
ゐゐゐふおげし絶しゝ出つゝをりくれほうづゝひ、
毎えぎをるゐ源氏の君ふも前坊の御母恵の
あそ弾り弾ゐあ弾ゐんをゝをゝゝこうづゝひ

ねせよかしねどのゝ方ひつゝしばぎふんふゝ
よしゐる人とけまでもきまを弾ひゝゐゝより
ゆゝる弾ゐゝゐゐゆゝゝゝおゐされて一日内より
まかでのゐそゝゆゝきをおそゝゝをゐほどゝゐれ
ぎ参そゝでおゝしつまぬる御門乃もをゝ牛車た
てさをそゝゐ隠ゐゐゝをゝゐるゐどゝをこ
ゝはゝゝそゝいゐのえぎ未をいゝ掛ゐゝてこゝ
くえゝ日をきをひゝめやゝふんふゝ思ひやら
をものふゝそのきゝゝをゆゝゝゝぬほどの掛の祝杯

風のおとづれはひさしくたえじがくるも。はかなれに
なほえうしくなくしてつゝぬつまおとゝきてなし
なみもはんなきえきしてなかにしと世に名高く
ありしなへだ。あがふべくもはかし。無比景下の御ともの
と御みゝとゞえてやすおそしまれ。関るはふそふなる
ほどちのはるぶらひよ。人々そやとはなそてつはとめに
さらぐれどに。御殿にはきさし給ひつ。井でなる
ほどなきと。見るくちをしらおぶきそだ。ねじも出ぬれば。
御車よせおりのひとらゝそんぎまうし。つくえき

はるかひらちかゝるまゝひくはかせの人のふけさぬほどるまゝ
なく兒でゝくはてになやあめしふくふみひみちには
まいとかゞやうしるづらして。うみにいでゝる人と
なぐさめばそらしみもなにあゝせてうちながめおえ
さうじにいとへしくして。中なの君といふいできて。思
給へうけぬほどのはるぶらひよそ。はかまもいとかなしう
いうくからずきかにらずになんとて。御きゝさし
いづるさらなくだいまなもまうでやさしくもまゐ
りはりて。はるさまもうけ給へまかし。うへ思給へ

ちかづくよりはじめ異形人つくりてはむかんざしのわど
をとゝ今までえたらんせさせ給へざりしうへもかた
ふこみやのほうぎゝ殿のゝ殿の者ども(を)させ給へぞこの乃
ちゝきゝ女はんぐるーらの(を)ちいるとゝのまひいで
つゝ姫うのいふうつくしうまひいでぬへんなど
はんぐし殿うゝ思さかれど大うゝのはらぶひいと
こまやうゝ(を)ちかくゝ(を)ちりそ給へぬ(を)ば又のとぶを
ゝそゝきゝ殿ゝはきくゝよりゝ(を)ちて出るひぬゝくぬれへ(を)
ゝゝせ給へはこうろざしはいぶいなきゝ出ぐめき

も(を)むかゝて後ゝをりゝしれはせうゝそこあゝぞ又はみ
づうゝをまうゝで給ひるどもるほぶゝふゝ給づゝんま
さりのゝせゝゝそ(を)ひくゝゝゝでゆゝくゝしくゝおりうふ
ゝひうるはあゝひふいゝどはんのゝうゝまりでゝこし
ろよ給ゝふ思ひやもつゝきこゝえでるめるゝゝさゝへ給し
ゝぞ給ぐゝれるゝを思ゝゝ殿おうゝ紀ゝるわざわざ給
どうゝもゝでゝさゝゝぞゝゝ佛みゆも思ゝきゝぞゝゝきゆ
ゝゝうもゝまゝぞゝゆゝふゝ(を)ちゝゝ(を)給るはんざゝしのわどゝ
うれしくゝ給ぐゝるゝ給うゝゝかうゝゝ給ゝ紀はんのうち

そひぬるとぞいとこころづきなくうるはしうおぼさ
るるをいとうもをさしてはかきふいとよしはんいとも
て御せうそこうもちきこえみはなどおとしも
まねりあひつまねやうなるはかふもんらをはうま
つとをかとこ二年ばかりふもかりぬるばかりの御ん
もさこそいへやうくよろづ思ひきこえしてあひて
いときうとげふいあべきをうふしあはるべうはる
さびなつうつうあひあはせまづひこの系
もいひこそびなまえうつうはるはどのてふきさうこん系

けうそうにおるべきをいとまこうくんのあるとのまづ
くうちおきかづくおかれつもるかきはまふつけて
とあそれとはんとあるりぬべきをうはるさびんふきさ
まをこそきこえかへどかえらかつうかんるまけも
いとはいるくおかそうて人はそれはいくそうかう
ぬかどふてやうかはむとおかしうつるはんらはふはは
ぐべうとはのぐりはまあ年かへりてきこれふも人の
はんらうもうけがくうをかさのまうゆく人分
はかどをおかそふもいとかくべきかくいとはしうそえ

しひてもきこえおもむきなれば。京方からはやふおも
ほしめずとも。つゐには此ごろか。おふいどのにはよからじの
ことおきつ。さるほどにかのおの国ころりのとかくなる事の侍
づもに。悪き之時りくじして。日もいとせばりに。いとどおも
ひつびのひてハ。其の物とてなどうちしえまして。
うれ人ゝえんせずや神のなみだ川うかのながめに
ましあふらる。こよひも大殿にハまちや給ひしのあとを
きゝながらかしこまりてりなくくおぼしけれバは
おなどもたとふなくうちやつしてぞおはしける。例の中

なびて。ほのせうそこやしつてふがいとかうあひしかくご
きなくとてうせのやと。筆どるをかゞみなはんさぎしのお
ど。ハあはれかしこまで思ひたる方へ(たづぬ)ども。ことひら
みぶりごうちれあんざいらでたしちからもえこ
じろき侍るきバ。みづからはえやおえさせぬをおそしより
しれをまもいかにバらしごろなれうしこゝまでも。のどかふ
きこえさせ侍らんとや出し。なひくへあらえなし給
すむとハ。いとあやまりしあがしるもんかくもとや
あひて。此みそれやおんなりのかくそはなおそいと

かゝきらはなりとも。かばかりなる様に戒めぬことは
ばしるとも。年ごろといふばかりに心得たれど。さり
こそ御覧じ志るらん。そのなかのらうかならずへさ
せなりぶから掲げあらはすまでなすせなるべきふに
やさ。人ばかりなくて。女は何事とぞうちのいまはせ
ずなのん。深きら遠へもなくさゝはりぬべき様なし
なくかゝはらむ。まじなかりせんそはあじんごとしく
き深かる御うちの何かごひとし。人づてなくてなきこえ
させむるとて。みなさしきてなかし人のかく人くさふる

のこりなくいひきこえともに思ひあつかひてこそいれまじりぬ。
女君にもむかしもかくまでふみかよしもまゐりて。女房の
晴着秋月の影を眺めつらもかくてえんなる事をも。な
がらへざりしておそれるほどなりぬことかゝづひ入
つ。法し此もとしに思ひよりすみきいとからそれや
なる衣のさ女に思ふとともにいでは人もよもあは
とおぼしぬべきさまなるとおぼえやすらかなへたんら
ちとし侍りぞ。
さよひぶふにあるまはふきよなにもなかりぬべく

とかく無るものを。恋しるばもとゝ人をとゝふとうごく
のやうふのもとゝふきもとゝひろ。きぢうにて女えらむむ
くつきうかりぬまじどさもぐふよそたぐうとゝ年ごろ
ゆゝしなまものひぬ迷ばむぎふとてぬ人乃ゆときとゝん
やうにきうくうとゝ出ぐうとゝ和ど行ゝまばみや。

風ふきとゝやなゝかあそ孫ぬべきみぐまやよそ
のゝうぐよもをみをかぐぐまーやと。迷びやふのきふと
もかきとゝうふひつるぐとかゝうゝてやをう
ぐらもす入のふきをひるまばうじをやをんやめ

きそおさうりつ。帰ぐれ出ぬ。ぬしぐ。ぐてかゝじ
ぬかをまじどゝはみぐ。かをまぬる年月もかをかをぬんを。
かぐかゝうをゝゝゝふはてをるまゝ孫をもむおう
のづゝきうゝ先ゝ行そをるやうも仕るむよのつ
祈乃をもつきふんあきゝ。出ぐゝ紀をぐゝさふ
思ひうひはゝぐゝはゆきまゝ和をもむわどゝうまゝのうお
ふきかきんうさゝふゝつひはゝじ。ぐかゝかぐ
うゝぐゝふうもをかをむるげきのやどをかゝはし
やゝさせんとぐかのふなんとていとのどやうふさ

まよくもてこづえんてこつら思ふ人のこのびてくれ
ぬるけぬをいとよりゆめてきてせをふ佛をうひのい
ひまこびなつうしなてふ所のえんかしきふ女もたまれ
とおがしきこゑゆしびはきふしもそさたつぬをから
うたのやふくはるをきしにふえんづようとそはし
はんぞ風をやくふうもゆて秋いこゑぬけゆくふど
はうしもはるがくふて時ゆく月ゑもさしさは
きやうるまばはうふうるみどうにきもをさ
しへびてからそをるやうふて そひふ様へふ人

ぐいからはうるまときしにとうてみるさしきこゑき
てとろうぬしぬいとかくのびにくにて女のわどを
女をふびくしうんうくにくもをしうおぼしきてあ
まなりて人きこふうるくしくふぎはきこと秋さ
びくふ人をは思ふんわども志ぬどうるまはくこびう
しうかりうを人の抱いひもかくまるき芸ふのをうきく
かうびくにはをやもまいでもしとかくふおがしみびま
つあびたうまとくふはるるびふくまはびてうもを
をぬはまをきをんびるまうえんはひくおうはは

数ことかぐきえんのやとおわるべしいとぞ紀ぬ乃
よのなかのひとそうかくて時乃ちうかりぬるふ入
うの月いとんづそくかぜこり
かすもしまもそうかきうあまてふかぐりかな
えるもの秋の月いづぐ法んぞるとやえ行へぞ
おぐろきよ多よりさかぶ也の秋乃すめる月
もとことふえんまし紙そ法ぞりうづまてえんもやうな
そねをこまやうふれつうかくひおきて出のあ
こて行ぬうもゆうきまばあるおどの京めき

一紀も同じんふるらんぜばるむいみしきんよどひ
も所こしハ思ひのどもるやうも侍まし波なまり
うもしいと紀らばふるんとそせちかくしぶ
なひやのもつもいとうまれくそづうふどこし
ねさまを出のうり波ゆくそそ河やしくそしきく
てこかくまぶうしなへるゆきまて行など河くまで
よういをなのてふらそびあをんふまほどの波
ぐさの夏部ふぶぐしまをうぶ(ら)ゆとるかくめなど
いそむうれく河るえぞくふもいぞけんと

まりて。あかいでがてふやまとひのみわどの御殿の人〻。
こゝづくりとさゝと泥てはりぬと。そのうゝさ
つるもんなどゝしく。ふくつさへおぼるれどたのるが
ちふたゝまし〻おぶし。ゑとふ〻ゆんのほどもい
とわ〻し〻。かゆにとぶ海のえんのとかさをかゝむと
おぶしかへして。はゝ。ゆるぬわどの殿ゐ。れえ乃古殿の
まぎれ。ふ。あちかゝ。ゆ。て出のあとぶ。

三のひ　神ぶ出あまおえり　むまびおきゝかさのこふふをうせ
　　伊ゝ　ちのぶ乃ゑまをつゝ

八のひ　もたつ風ふもうて
九のひ　ものとものもゝ
十のひ　長くや人を

神びだて子まびしあはこわゆゑ
まちかりのみ風やそらん
おきもせず神もせでうる夜あうして
ものもものゝてるぐえらし紀
わゝびゝてゝもひゆるばまものの
おぶぐやし人をつゝしおもけん

世ふゝ原の物語ふ源海島原の
ゆるのもしめの見えるもるもしわう
紀屋大人のはゝとのかゝめのふめ成
まゑひゝもゝ殿ゝ殿ゝ成
おのまるゆるみうひもゝめ出て回し

うろの友たちもめぐみ板ふきつ
つまやかりいろいろ
寛政の四とせ
尾張玉海部郡大脇高門
春

古事記傳

附三大考
目録類字　四十八冊　薄用摺　十五冊

本文古事記を綴三巻ふて上巻は天地の初發より鵜草葺
和合の御代ふ至るを所謂神代の事と記し神武天皇より推古天
應神天皇までを中巻やし所謂神代の事と記し仁德天皇より
皇ふ至りて止る以上神代及三十四代の御記なりまた
四十三代元明天皇ふ和銅五年太の朝臣安万侶の詔を奉て
天武天皇御ふ授りて稗田の阿礼という者常ふ誦熟た
ふ勅語の旨辞の旨を撰録し先たまひ考れむ上もの
く尊き國史なり皇國に生出たらむ人のかぎり先いや
さきふ拜見して純實の古傳を窺知て皇國の世界万國
よ勝て吾國ハ君ふ生たる支由と心得神を貴
み上を敬ひ其身の皇國ふ生たる幸と歎べき支なりさ
もど此の記ハ辞ふるく趣今と大異れを既より讀によ
み難く哉ふにあちこい勝からふ遠古事記の釋同釋注れ
どり書名元々集ふ引もれど今ハ新べくもからび
日本書紀ハ末書多けれで此の記ふ及がされむとそ
世々の先達儒佛の見解ふて取あつくもたるのみる

板元　尾張名古屋本町通七丁目
永樂屋東四郎

れを却て支の妨になり来かけるを凝し三十餘年れ
ひ高く志たと立古人の未曾有の學問を本居先生深く
憂エ夫成就し一世の大著述ハ普く古記に有ハ古事記注解と
ふべき考と傳たとしる一名らもたる通の注解ハ体裁同じか事
古傳を彼の漢書なる辨じ載て普の注解ハ体裁同じか事
ら支の書ハ簡なる本文書春秋等ハ傳ハ一ら意也
ふや上代の首ハ日本書紀を繼後世ハ聖德太子の撰たまへる
○六國史の首ハ其二書と為ら聖德太子の撰たまへる
奮事紀ハ其二書と為ら聖德太子の撰たまへる
たる支此書一巻ハ論辨あり先巻首古記典等ハ總論に
いまけるやうハ日本紀ハ允恭天皇四年八月始て諸
國ハ國史を置て言事を記さしむとあるを朝廷ハもこれ
れより記さきハ日本紀修撰の頃ハ古記あるをもて推古天皇二十八年聖德太
さきハ既く史ハ記さけむと知れ有しかく
一書と為ハ
子蘇我の馬子の大臣や臣連伴造國造
百八十部并び民等の本記又天武天皇十年小川島皇子等十
と

古一

二人ハ古諸の史を記定しめ給ふと
おかせて帝紀及ハ
日本紀にハ
と以へと二つとも世ハ傳そらはしく
元明天皇和銅四年九月十八日太朝臣安万侶ハ詔
せて此古事記を撰録しめたまひ同五年正月廿八日功
終て貢進と本書の序文ハ見ゆ日本紀ハ同天皇ハ養老
四年ハ成より續日本紀に記さをたれど此記ハ八
年むくれさをさて此古事記ハ字の文ハかざらびて
ら古語をむ孫とし古の實れあるさを失をじと勤た
るふそのよろより漢學さうりに行くれて何度ハかる
たのさのをうらやをハのみ日本紀ハ漢の國史ハ似
さをバそれと悅び此記のするやるるを見てハ正しき
國史のさまるらぞとてをらぞるる世の人彼とのをれ
ふしみ用ひ此記ハ名とだハ
事紀の偽書たるをも辨ぜられ半りその大畧に今
世ハある旧事本紀十巻聖德太子の撰うひし真の紀ハ
を非ず後の人の偽輯さるものハして古事記と日本紀と
取合せ又往々古語拾遺をしも取り但し三の巻の饒
遠日命の天より降り坐時の支し五れ巻尾張連物部連

の世次と十の巻國造本紀い他ふ古書ありて取るる物
なるべし。以上取捨ふまらの論あきば二書ハとられざり
しなり○或人古事記成で後八年と経同天皇舎人皇子
ふ日本紀と撰ぐしめのひ成ハ此記あやまりの故っ
との疑問ふ答られるる支世上流布の本二部ありて一つを偽勢度會の延佳
異本ある支世上流布の本二部ありて一つを偽勢度會の延佳
文字誤脱訓もすべていところし一つを直されたれど已がさら
神主の鼇頭本誤脱を訂し訓も直されたれど已がさら
しらとも加へ字も私に改ありと見えて中々の支ばり
この外ふ先生を比らくして得られるが一部又延佳神
主異本どもを挍して書入らきさふと其ま写し
たる本又京都井敬義の藏書これを寛永板ふ大ら同れ
じ又てが尾張名古屋大須真福寺の本誤脱ハ殊ふちげ
きれど奇き異本ふこもれ用捨訂定し校文に立ち
らも大字ふて書し訓ハ更ふ古書と證として嚴密ふ考鑿
しこやく傷假字を施さきたれぞよむべ人此訓を誦習
く見覚えさて傳ハよきく○此傳著述の
文字を伴の信友主の鈴屋翁暑年譜に明和元年三十五歳

にて古事記傳の稿を始め天明六年五十七歳に時上巻の傳成ふ寛政の始刪成とづらら彫ちさとかきそひ
に傳成又さ同一年六十九歳ふして下巻ハ傳成辛
後文政五年に至て全部刪成
此書を古訓を解し古意とさとさたるハとともふて
そべていさうのとをくもしくつまびらかにあげ
つろひて古學の趣まさ後ハ世の辞れきまでできま
へなうれたる書紀とはじ先とろの古書ハ
さらふまいをず又後ハ哥書物語書を見るにちわきま
ふ屋き支ふ伝けきばかへをよみ心得むくべき書ふ
ろよし附巻目録凡例の末ふ子息春庭主記し賞れさり
一巻

古記典等捨論　書紀の論　舊事紀とふ書の論
記題号の事　諸本又注釈ハ事　文體の事
假字の事　訓法の事
直毘霊

一巻終

此書ハ道といふとれ論ありと注してとが神道の本意と本
文ふ述有注せられたる古人ふ發の明年にて當時より後々

まで議家ふおいて議論ゆゑ〳〵ざまどそハ皆取ふとりゝぬ此
説にて此書ハしと学者必闇記して常ふ口熟後世と教導
ゆゑ專要の大章なり

二巻　安万侶奏上の序文と載てくてしく解る次ふ系図　二十五丁　古事記の
　　きりの神人の系譜ふして間論注を加ふ
三巻　天地初發の段　一丁　神代七世の段　三十三丁
四巻　おのごろ島の段　一丁　みとのまぐわひの段　十四丁
五巻　大八島成出の段　一丁　諸神等生坐の段　三十丁
　　伊邪那美命御石隠の段　五十丁　迦具土神被殺の段　六十九丁
六巻　夜見の段　一丁　街身滌の段　三十七丁
七巻　三柱貴御子御事依の段　一丁　須佐之男命御啼いさちの段　十五丁
　　御宇氣比の段　十九丁　男御子女御子御詔別の段　五十八丁
八巻　須佐之男命御荒備の段　一丁　天石屋戸の段　十七丁
九巻　須佐之男命御被避の段　二丁　心俣とわちの段　十三丁
　　須賀宮の段　三十八丁　大國主神御祖の段　四十九丁
十巻　稲羽素兎の段　一丁　手間山の段　十四丁　根堅洲國の段　四丁
十一巻　八千矛神御妻問の段　一丁　うきゆひの段　二十八丁
　　大國主神御未神等の段　五十六丁

十二巻　少名毘古那神の段　一丁　幸魂奇魂の段　十六丁
　　大年神羽山戸神御子等の段　二十八丁
十三巻　國平御議の段　一丁　天若日子の段　十五丁
十四巻　大國主神國遷の段　日向宮御鎮座の段　六十五丁
十五巻　御孫命御天降の段　一丁　猿田毘古神門射加の段　八丁
十六巻　猿女君の段　一丁　木花佐久夜毘賣御子産の段　三十七丁
　　大山津見神詔の段　一丁　綿津見宮の段　九丁
十七巻　御幸易の段　一丁　鵜羽産屋の段　六十一丁
　　火照命奉仕の段　五十三丁
　　鵜草葺不合命御子等の段　八十九丁
十八巻　十九巻　廿巻　白檮原宮の段　神武
廿一巻　高岡宮の段　綏靖　一丁　浮穴宮の段　安寧　七丁
　　境岡宮の段　懿德　七丁　掖上宮の段　孝昭　十七丁
　　秋津島宮の段　孝安　三十四丁　黒田の宮の段　孝霊　三十八丁
廿二巻　境原宮の段　孝元　一丁　伊邪河宮の段　開化　四十一丁
廿三巻　水垣宮の段　崇神
廿四巻　廿五巻　玉垣宮の段　垂仁
廿六巻　廿七巻　廿八巻　日代宮の段　景行

廿九巻　日代宮の段　一丁　志賀宮の段　成務　四十七丁
三十巻　三十一巻　訶志比宮の段　仲哀
三十二巻　三十三巻　三十四巻　明宮の段　應神
三十五巻　三十六巻　三十七巻　高津宮の段　仁德
三十八巻　若櫻宮の段　履中　一丁
三十九巻　遠飛鳥宮の段　允恭
四十巻　穴穗宮の段　安康
四十一巻　四十二巻　朝倉宮の段　雄略
四十三巻　甕栗宮の段　清寧　一丁　近飛鳥宮の段　顯宗　四十八丁
廣高宮の段　仁賢　七十二丁　列木宮の段　武烈　七十六丁
四十四巻　玉穗宮の段　繼體　一丁　金著宮の段　安閑　二十三丁
檜垣宮の段　宣化　廿六丁　鯽木島宮の段　欽明　三十四丁
他田宮の段　敏達　四十八丁　池邊宮の段　用明　六十一丁
倉椅宮の段　崇峻　六十八丁　小治田宮の段　推古　七十丁

板元　尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎

萬葉集畧解　三十二巻　薄用摺　十巻

此万葉集は上古雄畧天皇の御代あるより後は寧樂朝ふいたる迄上天子より下庶人ふに至まで長哥短哥雜躰何とれも種々の哥を廣大ふ集たる所謂古躰の哥集の大成なるもの也○万葉とは昔加茂真淵翁の万葉考に万は數の多かる也葉は言也にて哥と云ふ也や荷田の大人跡かゝいなれき或人くから文にて哥と云ふ世の意れるふ依つれどもしの字を借しのこ也葉と哥ふよせぞバ何を集ゐるやも聞えじ○集たる人は是も同書に高野の御時天皇孝謙橘諸兄の太臣撰とはまへやは世繼が物語ふ見ゆ是れや高野の御時より前聖武天皇の御代ゆ為らんとおもふ事あるも也諸兄の大臣の撰ぞちふも古へ〻りいひのたへ〻ふ〻實ふさゝけらし『普通の說ふも孝謙天皇の勅を奉て撰たまへるさまを諸兄公薨逝の後に哥ゐもさあれを或を家持卿の增加あるしとも云ひ又諸兄公ゐあらばやもいひ種々先達の說ゐれど加茂翁も真の万葉集といふを今ゐる二

十巻の内ふ六巻うりて其餘も万葉といふものうしなひらざるよしをいひて上の如く諸兄公の撰ふ治定せらるゝ惣哥員の事八雲御抄に四千三百十五首袋草紙に四千三百十首とやうり○加茂翁新に改めらもたる巻次一の巻二の巻と三の巻と今のごとし今の十三巻ハ今の十四の巻五の巻ハ今の十五と十一の巻と九の巻と今の八と十二と今の四と十三

大夫の家の集今の七の巻と十の巻ハ哥も聊古く集ぶとも他とかゝりて此二巻をこらさむやと誰ど一人の集めさるなり今の十五の巻ハ新羅の御使の哥と中臣宅守茅上の娘子の贈和今の十六の巻ハ前後由縁ある哥ふて中に河村王大伴家持も入る家ハ戯笑躰とのせさるゝ中にもやあらむ今の三の巻四六八九十七十八九世ハ家持の家集の中ふもやあらむ今の十九世ハ家持の家集ぬる事さがうちゆをふ加茂翁微細に考今の十を七の巻と今の七を八の巻と今の九と十の巻と今の巻と今の八と十二と今の四と十三巻と今の五と九の巻と今の六と十五と十四と同じかくあれば此巻解に八今の本のまゝ次ふるせるも年久しき事ハ此注解ハ万葉考同別記のいつよりよし凡例ふもろいとはいひてうけつらひしを説しよりて翁沒後ふも友達論じあうし考得そりと思ふも〻〻加茂の翁の家ふつひてはいひ出せらに翁の考もらされしし思ふひもと人々のいひ出せるい一て又契沖法師東万呂とハあげつもとも凡例ふい

本居の先生の説をもうまさ采録し千蔭自己の新説もそれらばの○枕詞の注ハ冠辞考に申つりて器しそれふもをるを附録ふ注をるよし也○異本校合ふ用ひたるも

○古本ハ東丸の本えしら

○活字本ハ本のまゝつ丸ちのげほ本こ。伊勢。國

○人のもてる一本ハ賀茂翁の書校合せり。官本ハ代匠記ふ校合

○拾穂本ハ季吟の古本校合外ふ。古葉。器要。集東茂翁の考傳抄上加

○古葉。器要。集。聚抄ハ春の日の若宮神とも垂の彼先祖江戸田茂世葉長轉の写こと

此器解作者橘千蔭と助けるよし

又源朝弦の三人なりけるよし

源朝弦ハ上補ふ例の

○二十巻目巻

末ふ此万葉集畧解をべて三十巻寛政三年二月十日よ
て華と起して同八年八月十七日ふ稿成をてさてあは
ゐ教へ正して同十二年正月十日まてふみつから
び書畢ぬ橘千蔭とありて影下も一筆かて終十年の間に
大成せるもの也巻首ふ寛政三年三月廿五日自序のり
次ふ凡例のり○此書畧解し題すれやも諸本と比校し
訓と訂正たる事叮嚀々覆極て勤多るものふして諸
注解の謬誤と改めたるも初心の輩ふも會得し易く平
假字も取迷き詞つきに書綴るとハへやも野部な
る事れく大簡ならず仙覺の抄ハ古風ふして駁雑なるら
て哥と解くふ益なく圓珠菴の代匠記ハ精密ふ過て讀む
ふも暇入り其餘諸名家の注釋少からねや此ふ得れで
彼ふ失ひ此畧解のごく全備しさるものを見び

板元

尾州名古屋本町通七丁目

永樂屋東四郎

三大考

鈴屋翁門人服部中庸著○天地國土のいりかさ其生出
たる初發より今の如成堅てたるまでの趣を神代固有
の傳ふもさらひ深く教得て伐ふ新ふ十の図と設け委
細に説明め古来の大疑を氷解したる前人未發の卓論
ゐり後ふ平田篤胤翁の著さたる霊御柱と云書と專
此三大考ふ原きて述られつらむと覚ゆ抑三大と
ハ天地四
大と称そる小海へたる号みるべけを佛説と
の異ふして漢儒の時説とハ表裏せを但後世に聞け
る西洋の測算ふよる如くれど是便自然にさるべ
神代の傳のもなるところ○神代ふハ天地泉相互き
小来往したるものを後ふも此三大魂ふらでも
通達なるべき由考を熟覧を露不審きも
支る○本居先生の跡ふ深く物よくかむ
れる西の國々の人どりよりいよいよざえらむ
ぐへ出ざるし支をしめづらうも考へ出たるかもく

をしくも撥出あるうもかくてはと高天原も夜の食国をいぶうしきくまれくはいうしびぬをえと稱ぜ
もて古事記傳十七の巻の次に附らる

神代正語　三冊

書名かみよのまさゝゝ訓ぶし○上代の支ハ上代の語ゝて語傳けれぞそれ記せる書ハ皆漢文なれど文字遣ふ拘らひて古言と失ひ古意と知ふ害多し古事記ハ古言を傳ふるを旨とせゝもたゝもバ文字の傍ふ片假字つけて皆古語に訓返されつきゝ讀者を猶文字ふ目のつきて訓のおろそうふみてぬべきをうきひ神代の巻だふ殘らび假字ふ書るし初心の輩ふよみ習をせんとおをひみがら日順經しを門人横井千秋主おみじ心ふをひ發して此著述を請きけきバ翁甚悅ひ寛政元年四月五日のかどにかき終られたるよし序文ハ巻首よも見えたゝ其躰裁ハ神代の巻を古事記と書紙とを合せて支のおもふきいゝしも異ならぬは古事記よよ

てい異なるを別よりはあげて同支のうのたがひとも二無別ゝハあげぞ同支のよれたる支を書紀を取て古語ふりへしてあげとの二典よハれさる支の異古書よみえそるとも一つ二つはげらもたり神名地名をべて物名ゝ文字ゝてゝたるし一々訓注を附清濁のさゝめ尤嚴重なゝ○初學の輩も先此正語をよみ吟熟て古事記傳をもよむ時ゝ學業の本末ふ詳しく軽卒のはやまちぬうらんうし○遠江人栗田土滿序横井千秋主駁あり

出雲國造神壽後釋　二冊

往昔年々二月三月又正月四月ふ月ふ月ふの頃出雲國造朝廷ふ參ゝて物献りて神壽といふ事と奏ことゝ有其儀式のゝそめの支ふらびとの神壽の詞を延喜式八巻祝詞の部ふ載られて詞と調をいと古く他書ふなき神代の傳も殘りいゝじくえでたき古文章みれバ加茂真淵

翁の祝詞考ハ深くめでまふとみこれを鑒ゆしてを祝詞をもじめ万の文をもかきつべけもとをるされてよて世の人うりうやうの名文ハるとを知そめ本居翁おいよ〳〵尊ぶれて此書の抜ふ古風の哥をもちるされさて○後釋をもく祝詞考の文と悪あげ頭書をもうさずうつし出し次祝詞考の誤りを理て自己発明の新説を微細ふ記さる○小考の誤りを理て自己発明の新説を微細ふ記さる○

寛政五年九月出雲國造俊秀主序ハり同八年刻成

御遷幸長歌

折本一冊

天明八年正月晦日内裡炎上寛政二年新内裡造営成り
て十一月廿二日遷幸ましぬ翁今年六十一歳都ふ上
て御うつろひの大御よそひを見奉てよまれたる哥并
反哥二首なり御行列のミわてさま眼前ふ見るごとく
よみなしたる古風の長篇にして長哥よむ手本ゆれと
もきさるハいらじ大館高門御遷幸をえ拝まぬ田舎人の
たゆとて木に彫しひ

三代調和歌類題

六冊

三代とハ古今集後撰集拾遺集れ三代ふて大うと同じ
風調の哥ゐて詞も調もいうぬ支るく哥意雄々しくも
やさしくもそべて花も実をもれそてこれを大空の
月ふゐとへ代々にくもらぬ詞の鏡ゐもハ定家卿の詠
哥大概ゐも詞ハ三代集といづ色からしハのたまひ
おきてたてさもバ此類題ハ此三代の作者の哥またよ
み人しらもぬも三代の作者の吟つきゑるきハり
さず三代集くゐとよりふて世々の勅撰古今六帖菅家
万葉哥仙家集夫木鈔ゐどよそぬき出しえらひ集め哥
ふ随て題を附もども哥書の詞書ハ省ゐず四季恋雑に
類題して初心学の手本ゐとなしたるもこもハ三河の國吉田
の城ゐる岩上氏の家刀自登波子といふ哥よみ文かき
がえらみふて女ふハ女づらしき支ゝ但しくそゐてを
めたゐハ夏目甕麿定りか祢つる支とひあてせたる
く中山美石實相院古道ゐどのよし文政四年六月う
れさる本居大平主の序文ふあて今や都も鄙も哥道盛

小行きて初学の見るべき為として類題のあまた出来ま
ど大うさえらミ踈よて哥数のミ多きも風躰のようら
ぬまさ写誤なぐまじマてハ害ふこそなれ證例ふもひ
かもず座右ふかきても益あろ支なし抑哥ゝ詞やさし
く心それかに品高くこそよむものるをそも人ふま
さらむし新奇をのミ好むときハ姿も詞もぶざまも異
様ふのみなマ行てこもハ邪路ふかちへいふものみ
れぐとさらくと此あうめ支なき三代調とよみそらん
じて詠哥修行あるべきしもと三代調類題とのミある
を和哥のもじ入たるを見易らんとてのマざなり
巻尾ニ文政五年春松齋藤井高尚ぬし跋あ

江戸職人歌合　二冊

東北院職人哥合鶴岡放生會職人哥合などの風ふ倣ひ
江戸當世の職人をあつめそもらが七月十日浅草の観
音堂ふ通夜し月く恋代題もて哥よみさを左右につ
がい名主能も哥よミ判者よもなマて勝負どつけたる

やうにつくマふしたる戯筆ふて難陳もあり哥も例の
ぐく俗談をまじへ為るが今の狂哥者流のえせ哥ニも
あらぐ上手の口つきいちぢるく画も加へたるふそのの
さよ見るがとしいや〳〵興深き哥合なマ

一番左名主　右大屋
二番左儒者　右医者
三番左八卦見　右人相見
四番左いちこ　右頼人
五番左青物賣　右魚賣
六番左虫賣　右笛賣
七番左馬方　右車引
八番左呉服屋　右ふるぎや
九番左女郎　右藝者
十番左夜鷹　右船鰻頭
十一番左鐵多　右乞食
十二番左鳶者　右臥烟
十三番左猪牙舟こぎ　右四ッ手駕かき
十四番左覚兵衛獅子　右輕業
十五番左ちぐや　右湯屋
十六番左紙屋　右茶屋
十七番左酒屋　右餅屋
十八番左みそ賣　右ざる賣
十九番左筆結　右経師
廿番左屋根葺　右左官
廿一番左畳刺　右石切
廿二番左水〳〵や　右上菓子屋
廿三番左付木賣　右幕賣
廿四番左座頭　右山伏
廿五番左念佛宗　右題目宗

○石原正明弟鬱郎文化五年五月十五日伊豫國ふてか

けるを序あてまさ正明の奥書ちを　右江戸職人哥合ハ
文化二年七月十日浅草寺ふ於てこもりて磯部千貝聞
書をる所なて奥遂さちふ依て傳写と聽さる池南搢紳
藤原春季図してもてことと賜ふ珍重こと予以為此屋
封をべきれ世も猶四山賊あて昭織人をして文化ふ潤
浴せしむ堯舜の民ふ勝きるものう重て珍重

玉勝間　附目録一巻　十五冊

是ハ本居翁の随筆ふして若年より讀書の度抄録あて
てやてすつべきふもちらぬ吏と始事に觸て見聞けり
しこやの沙汰道にうれる教のこふとあらば花紅葉
ふよれる風流今昔都鄙よつさへたる土俗の習何と定
まりたはてもれく年頃筆のまふ書をささもたるが
尋常の人れよしるしお中をとたひ古学者の為ふて
金勅ふも換ぶさき重宝となりぬ○尾崎雅嘉云書體全く
随筆ふして古書をあ記録の参多して
ゑゑ○文化九年正月植松有信跋ふ中ふも式と書
此ふ

むのうさら爰つくろはすうきゆり給へるハ今も昔つ
から物ふうたまふやうふて川拳をくてかへし見る
たびふ有信等をのうみ大人の御許ふさぶらひていひ
きうせるしてスエ○初若菜ふてをもひ草
の巻まで翁の彫下るて以下ハ翁没後他筆ふて清書を初編を寛政六年刊行の
ち三巻ず彫刻し目録一冊とそへて十五巻五度ふし
て成就をるよし孫本居萬ア呂目録の後ふ記さる彼の
目録を十四巻中の件々ふ附とくてしくして見る人の
便宜とし
○詞草はをく紙に自由ふ玉がつまはみてあ〜ろを野の
べのをさびふし　ぢの巻の首ふ記てやりて書紙とせり
一の巻　初若菜　六十条　二の巻　櫻の落葉　四十七条　三の巻　たちばな　四十六条
四の巻　ふすま草　八十条　五の巻　杜野のもくき　四十七条　六の巻　あわ　八十七条
七の巻　ふぢなみ　六十五条　八の巻　萩の下葉　百六条　九の巻　花乃雪　六十二条
十の巻　山藤　九十九条　十一の巻　おもひ草　百一条　十二の巻　椿　七十一条　十三の巻　小ふき　八十八条
つ〜　九十二条　十五の巻　惣目録　十四の巻

發行書肆

京都御幸町通姉小路上ル　菱屋孫兵衛
同　三條通御幸町角　吉野屋仁兵衛
同　寺町通三條下ル　蓍屋宗八
同　四條通御旅町　田中屋治兵衛
東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　両國横山町三丁目　和泉屋金右衛門
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　心齋橋通安土町　河内屋和助
同　心齋橋通博勞町　河内屋茂兵衛
同　心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門
尾州名古屋本町通七丁目　永樂屋東四郎

本居大人文

手枕